

六月やはだけし胸のおのれの香

藤田湘子

壮年の男の厚い胸を思う。梅雨入前のむつとした空気の中で、かすかな汗から滲み出る男の香。働き盛りの男がワイシャツのボタンを外した胸からたちのぼる体臭。いや、この句は体臭ではなく「おのれの香」といつている。そこには、ナルシストの極みのような自己愛とともに、「おのれ」を自制する厳しさも感じられる。

湘子六十五歳の作。中央例会に上京し先生に見える機会を得た頃。ご挨拶する度、先生はいつもいい匂いがしていた。いつのまにか香水の香りを覚えていて、街で似た香りとすれ違うと、ドキツとしたことを思い出す。

男の色香と、初老の域に一歩足を踏み入れた男の寂寥感と、結構複雑な読後感のある句である。

1991年（53作）第九句集『前夜』 鑑賞・野本京